

## 作文教育史における五十嵐力の位置

浅田孝紀

### 0 はじめに

小稿は五十嵐力の作文指導の方法論の特徴を整理し、その上で五十嵐を作文教育史の流れの中に位置づけようとするものである。五十嵐が作文指導の方法論について、その著作の中で言及している時期は、主として明治末から大正初期にかけてであるが、一部は昭和初期にも及んでいる。小稿ではその全体を視野に入れつつも、主に大正初期の理論家としての位置づけを試みることにする。

### 1 五十嵐力の作文指導の方法論の特徴

ここではまず、五十嵐の主な作文指導論を一括して抄出する。但し五十嵐には小・中学校で作文教育の実践をした経験がないので<sup>①</sup>、これはあくまで、もし小・中学校で作文を教えるとしたらこうしたい、という意味での方法論である。尚、ここには指導内容に関わるものも一部含まれる。

#### [資料1] 「作文に関する実際問題」<sup>②</sup>

第一には、生徒を書きたいといふ心持ちにならせる事、即ち書きたがらせる事で、之れについて私の最も有効と思ふのは、刺戟的の好評を加えることであります。(後略)

第二には、書くべき材料を豊富に所有させることであります。(後略)

第三には文章に関する通理を一通り知らせる事であります。言ひ換へれば、文章学、修辞学の大要を教へるといふことになりませんが、是れは修辞学の組織骨組などを学者的に教へるという事をせずに、成るべく修辞学の精神だけを簡明に、有趣味に、本離れて話したいものと思ひます。(後略)

#### [資料2] 「作文科教師に寄する言葉」<sup>③</sup>

- 一、自身の修業を、学生に対する教授の一部と考へること。
- 一、一通り理論を教へること。
- 一、並の学生の文章は少し添削し、褒めた批評を与へて刺戟すること。
- 一、優秀なる学生の作にはやかましき批評を加へ、わづかな利き所を少し直し、一字一句の加筆で、かうもちがつて来るかと頷かせるやうつとめること。

[資料3] 「教へる場合に試みやうと思ふ新方案」<sup>6)</sup>

私は其の第一の方法は彼等自身の心から湧き出た題材に就いて書かせることであると思います。……題詠が盛んになつて和歌の道が衰へたと同じ事で、題を設ける作文教授は大抵の場合、文を殺す結果になるだらうと思ひます。

第二には細かに観察して細かに書く稽古をさせやうと思ひます。……我々は美しく描く前に、先づ真を伝へねばなりません。真を伝える一つの方法は細かに観察して細かに書くことでもあります。……私は初学に文章を作らせて筆を入れるには、荒目に書いたのに継ぎ足しをして穴を塞いでやるよりも寧ろくどいほど細かに書いたのから、不要の無駄枝をすぐって、よく連絡くやうに筋を立て、やる方がよいと信じて居ります。材料を豊富に貯ふる事は文章を読みごたえあるやうにする主なる要件の一つであります。

第三には、細かに書く中に要点を浮かし出す事を稽古させます。つまり味わひどころ、力瘤の入れ所を際立たせる工夫です。……力瘤の入れ所を取りちがへては、折角の細写も一向役に立ちません。

第四には、スケッチ書きの稽古、即ち味はいのある要所だけを取り離して、それを細かに書く工夫をさせやうと思ひます。いはゞ一種の随筆式、漫録式の文章を書くので、部分を取り出して、其の描写に全力を注ぐ稽古です。

第五には組織段取の事をざつと教へやうと思ひます。組織と云つても、漢文家のように起承転合とか起承鋪叙過結とかいふ体製論をやかましくいふではありません。唯だ順序が立つて、よく引きつゝいて、全体が纏まるやうに書けといふ事を教へるのです。……八釜しい事は却つて教へぬ方がよい。下手な規則に縛られると、伸びる腕も伸びなくなる。けれども、自然に穏やかに続けて行つて、趣意が立つやうに纏める一通りの呼吸は是非教へておく必要があると思ひます。

第六には、右の件々を教へ込む傍ら、常に実用を忘れぬやうにする注意が必要と思ひます。普通教育の作文科の旨意は、文学の為めの文章を教えるのではなくして、実用の為めの文章を教へるにあります。……小学、中学の作文はあくまでも実用本位、趣味副位であるべきだと思ひます。

[資料4] 『作文三十三講』後篇冒頭部より<sup>6)</sup>

「作文」の實際的方面に於いて最も注意すべきは、「作る事」と「教へる事」と「読む事」との三つであらうと思ひます。

これから、五十嵐の作文指導の方法論の特徴を四つに整理してみよう。

①生徒の能力に応じた刺激的な批評を加えることで、書く気を起こさせる。

[資料1]の「第一」及び[資料2]の後二者に共通する事柄である。

五十嵐は高等小学校在学中、坂蘭溪・上村節山の二人の師に作文を習い、特に坂蘭溪が五十嵐の作文に「大家の文章にのみ加へられるべきもののみ思つて」いた圈点を加えていたことに喜

び、又上村節山の圏点と批評にも作文心を刺激されたという旨に触れた上で、次のように述べている。

私の生徒としての作文の経験の中で、最も強く私を刺戟して「書かう書かう」といふ気にならせたのは、圏点と批評とでありました。其の批評が長ければ長いほど、褒められれば褒められるほど益々強く刺戟されたのは無論であります。私が坂、上村の両先生に従つてゐた時は、両先生の学問界における声望と圏点と批評とに魅せられて有頂天になつて居たやうな気味がありました。(「刺戟力ある教へ方」<sup>(6)</sup>)

つまり①は五十嵐の、自己の生徒としての経験に基づく指導法の考案であると思われる。

②作る(書く)ためには良い書物を読ませよ。

五十嵐は「味わいのある文章」や「中心を浮かし出した文章」に対して、しばしば「うまい」という評価を与える。特にこれは文学作品に対してなされることの多い評価で、例えば後者については、『作文三十三講』の中の「此々だ!といふ所を浮かし出せ」という節で、

自分の趣意、心持、感じ、味はひを相手に知らせるには、無駄を省き、要を摘まんで、「此々だ!」といふ所を浮かして見せる工夫が必要であります。どんな事でも、精しく書くには限りがありません。……若し中心なしの文字並べに終はる氣遣ひがあるならば、思ひ切り枝葉を刈りつめて、太い幹を黒々と見せる方式を取りたいと思ひます。

かういふ点から見て私の感服して居るのは、古い物だが、清少納言の『枕の草子』の文章であります<sup>(7)</sup>。

として『枕草子』第一段「春はあけぼの」の一節を挙げ、「どうも実にうまい」と評価し、

……春の現象のさまざまある中から曙を選び、白んで行く有様の中から山際的一部分だけがポーッと明るくなつて紫の雲の棚引いた処を選び、段々特殊に特殊にと目の着け所を限つて行つて、「此々だぞ!」といふ所の印象を読者の心にあざやかに残した手際、何と巧いものではありますまいか<sup>(8)</sup>。

と言っている。これは[資料3]の「第三」および「第四」を実現するための参考にすべきことであり、五十嵐の文学批評に関わる問題でもあるのだが、例えばこのような文章を沢山読むことを、作文力向上のために重要な事柄だとしているのである。具体的には『作文三十三講』の「心から直接に」という節の中で、

一、第一流の書物を御読みなさい。珍書読みは後回はして結構です。書物の中の中心趣味を掴むことを心掛けなさい。

一、大家の纏まつた作を御覧なさい。名文名句集といつたやうな読本式の寄せ物は駄目です<sup>(9)</sup>。

と記している他、[資料1]の「第二」に関しても、

……書く事柄を持たせる工夫をしなければなりません。之れに就いて私が有効と思ふのは、……一つは青年者の新しい心と反りの合ふやうな、青年の心に調和し、若しくは之れを刺戟するやうな書物をどしどし読ませることです<sup>(10)</sup>。

と述べている。また、[資料3]の「第二」でも「材料を豊富に貯ふる事は文章を読みごたえあ

るやうにする主なる要件の一つであります」としており、同じ『作文三十三講』後篇では[資料4]のように述べた上で、読むべき価値のある作品として『源氏物語』や西行の歌、謡曲、近松の浄瑠璃などについて、186ページにわたって講述しているのである。

### ③実用重視

五十嵐は作文書や作文教科書の中で実際に作文の添削を行っているが、そこでは実用に用いる「書翰文」が優先的に扱われている。例えば『実習新作文』においても「実用上、まづ書翰文の実習から着手する」<sup>(41)</sup>とか、「実用主義で、まづ命の親なる米の注文から始めやう」<sup>(42)</sup>などと述べているし、[資料3]の「第六」にもその態度が現れている。

### ④自由題による作文の提唱

これについては[資料3]の「第一」が特に注目される。五十嵐は作文書や作文教科書の中で、「明らかに知り、深く感じたことを書く」ことを特に重視しており、④はこの主張から導かれてくるものであるが、「題を設ける作文教授は大抵の場合、文を殺す結果になるだらうと思ひます」という主張は、実は芦田恵之助の随意選題論と近時期にあるものである。そこで、作文教育史上の位置についても、これに関する考察が中心になってこよう。次節以降でこれを検討していく。

## 2 五十嵐の主張と当時の作文教育の動向

五十嵐力の作文教育史上の位置を解明しようとするならば、まずは彼の著作である修辞学書や作文書・作文教科書自体の歴史的意義について検討するのが当然といえる。

だが、五十嵐の修辞学書自体の作文教育史的意義、特に以後の作文教育に与えた影響については、おそらくさほど顕著なものかなかったと思われる。その理由は以下の四つである。第一に、彼の代表的修辞学書である『文章講話』<sup>(43)</sup>『新文章講話』<sup>(44)</sup>における修辞理論（殊に「文章修飾論」）は、作文の参考として活用するには学問的に過ぎるものであったということ<sup>(45)</sup>。第二に、作文書である『実習新作文』は、『新文章講話』で述べた理論の「実地応用」を図るつもりで書かれたものであり、それはとりも直さず『新文章講話』自体が一般の人々の作文書として利用されることを五十嵐自身想定していなかったからに他ならないということ<sup>(46)</sup>。第三に、[資料1]の「第三」や[資料3]の「第五」、さらには『実習新作文』に基づいて著した作文教科書『高等女子新作文』<sup>(47)</sup>（1916）巻一の序文にある次のような記述から、五十嵐自身、修辞学書自体が作文活動にそのまま役立つとは考えていなかったことがわかること。

抑も修辞学の知識は、そのまゝでは普通人の作文指鍼としてさまで役に立つものではありません。のみならず、やゝもすれば初学者の頭を徒らに規則せめにして、伸ぶべき筆をも萎縮させる傾きのあるものであります。

そして第四に、五十嵐の修辞学書を用いて作文の稽古をしたことなどを示すような一般（学校教育のみならず、作家や一般人の場合も含めて）の文献も、管見の限り見当たらないことである。

さらに、『実習新作文』『高等女子新作文』『中等新作文』<sup>(48)</sup>等の作文書・作文教科書が、国語教育に与えた影響を明確に示す文献も未見である。そこで五十嵐力の作文教育史的意義の考察とな

ると、主として彼の作文指導論を作文教育史の流れの中で位置づけていくことになってくるのである。尚、五十嵐の具体的な作文指導（作文書・作文教科書における添削とそのコメント）には明治時代然とした古い面もあるのだが、その点についての考察は別の機会に譲り、ここでは主に彼の新時代的な面に絞ってその位置づけを考察することにする。内容としては前節の④「自由題による作文の提唱」をめぐる考察が中心になる。

まず、先の〔資料3〕の「第一」を、もっと詳しく引用して示しておきたい。五十嵐は、小・中学生に「活きた文章」を書かせる方案の第一として、次のように述べている。

私は其の第一の方法は彼等自身の心から湧き出た題材に就いて書かせることであると思います。子供に限らず、誰れでも自分の心に根を托し得ぬやうな題材や、少しも興味を感じぬやうな思想を活かして取扱ふことは出来ませんが、殊に子供は心の働きの狭い浅いものですから、余程斟酌して彼等に相応はしい題材を宛行はねばならぬと思ひます。最もよいのは子供の身に最近に起こつた事実に就いて、其の明らかに知り深く感じたことを書かせることでありませう。之れに次いで、或は一級の生徒全体に同様の経験をさせて、それを有りのまゝに書かせるのもよいでせう。或は画家が同一のモデルを囲んで、てんでに自分の見た側を書くやうに、同一の物体や景色をいろいろの方面から見させて、自分々々の見た部面を書かせるのも面白いでせう。たまには飛び離れた空想的の題、例へば「寝て居る中に魚になつて海の中を泳いでいたと仮定めて、其の感想を書け」とか、「匿名で一万円を送つて呉れた人があらば、其の金をどう使ふつもりだ」とか、「難船して無人島に漂ひ着いたら、どうする」とかいふ類の題を出して見るのも悪くはありませんまい。題を設けるのが必ずしも悪いのではありませんけれども、余程注意して子供の興味を惹きさうなのを選ばないと、更に効能の無いものとなる恐れがあります。題詠が盛んになつて和歌の道が衰へたと同じ事で、題を設ける作文教授は大抵の場合、文を殺す結果になるだらうと思ひます<sup>(99)</sup>。（下線引用者）

これを見ると、「自由題による作文の提唱」とはいつても、全くの自由選題論ではない。しかしながら、あまり題を設けることによって子供を縛り付けるのではなく、子供の身近に起こつたことについて、明らかに知り深く感じたことを書かせる——という意味では自ずと題材に枠を設けているわけだが——生活文的な自由作文を「最もよい」とし、題なり条件なりをある程度規定して書かせる作文を「之れに次ぐ」ものとしているのである。要は、児童生徒の興味に合わない題の押し付けを退けているわけである。

さて、これを作文教育史の流れの中で見てみよう。『作文三十三講』は大正2年（1913）11月に出版されている。ところで、同年3月には芦田恵之助の『綴り方教授』が出版されている。となると、五十嵐のこの主張については芦田の「随意選題」論の形成との対照で考察することが不可欠になってくるであろう。

芦田の随意選題論については、かつては『綴り方教授』にその成立を見るが多かった<sup>(100)</sup>。もし随意選題論の成立を『綴り方教授』に見るならば、『綴り方教授』は『作文三十三講』の8箇月前に出版されているので、五十嵐の主張が芦田より早かつたとはいえないことになる。だ

が、近年の新しい研究成果（大正3年の「綴り方教授法」に見る滑川道夫氏、大正6年の「綴り方教授の指導」に見る高森邦明氏等）に基づくと、随意選題論成立を大正3年以降に見て、『綴り方教授』には求めないものが多くなっている。『作文三十三講』に最も近い時期の「綴り方教授法」について見てみると、これは佐々政一主宰の講義録『文章研究録』に、大正3年1月から連載されたものなので、『作文三十三講』より後ということになる。したがって、この五十嵐の主張が芦田の随意選題論に触発されてきた可能性は薄いといえる。

では、それ以前の作文教育界（明治末～大正初）はどうなっていたのであろうか。ここではまず、明治末期の教授書等における随意選題的内容の状況について概観してみよう。

まず明治31年の金沢長吉『単級多級・作文教授法及教案』から見てみると、これは全くの開発主義的な内容のもので、教案（教授細目を含む）も文題を与えるもののみになっている。同じく明治31年の槇山栄次『各科教授法』<sup>(20)</sup>でも随意選題的なものはない。ただし「自作の作文法」の語が見られる。しかしこれも「文題ヲ掲グル」ものであり、「補助的作文法ヲ用ヒタル後ニ非レバ、此法ニ依ルコト能ハズ。」（「第三、教授ノ作用」109頁）というものであった。また、明治34年の増戸鶴吉『小学校に於ける国語科教授法』<sup>(21)</sup>は、ヘルバルト式の踏襲であり、随意選題的なものは全く見られない。

前後するが、明治32年には樋口勘次郎の『統合主義新教授法』<sup>(22)</sup>が出る。ここでは文題を設けない場合もあったようである。ただしこれも「予は往々文題をも設けずして、児童に謀りて、それを定むることあり」（下線引用者）というものであり、個々の児童の「随意選題」であったとは考えにくい。だが、この書の影響は大きかったことが知られており、随意選題的なものもこれ以後徐々に現れてくることは明記しておくべきであろう。

次に、明治35年の佐々木吉三郎『国語教授撮要』<sup>(24)</sup>。ここにも随意選題的なものはないが、子供の自由を尊重する発言が見られる。「従来の作文教授は、子供の思想を、自由に発表させるといふことよりは、寧ろ、或る一つの模型を示して、其の形式に当てはめて」いたものであり、「作文の文題は、ソナナ形式を頼らずにも、幾らも自由に発表することが出来る」ということに注意すべきだとしている。（「形式に拘泥すべからず」492頁）

さらに明治37年の小泉又一・乙竹岩蔵『小学校各科教授法』<sup>(25)</sup>では、「綴り方教授の方法は其の種類極めて多し。左に之れが分類を示す。」とした上で、4類14種の教授法を掲げ、その最後に「各自をして文題を定めしむるもの」を挙げている。（「綴り方教授」63～64頁）ここではまだ随意選題的なものにも一応ふれているという程度である。

明治38年の森岡常蔵『各科教授法精義』<sup>(26)</sup>になると「随意に文題を選ばしむる法」という表現が登場する。（「綴り方教授」184～185頁）これは明治40年までに18版を重ねたもので、比較的影響が大きかったと見られる。ただしこれも、13種の方法のうちの最後の一種である。

明治42年の藤井慮逸・久芳龍蔵・内藤岩雄・新国寅彦『綴方教授法精義』<sup>(27)</sup>になると、「随意に文題を選」ばせるもののうち、「各個別々のもの」が明記されるようになる。（「綴方教授の方法の原拠」392頁）これも4段階16種のうちの最後の1種「自作法」のうち、これをさらに4つに

分けたものの最後の1つであるが、随意選題的なものに関し徐々に意識的になってきていることが窺える。

そして明治45年の小西重直・豊田八十代・小関源助・酒井不二雄『実験綴方新教授法』<sup>(28)</sup>。この書になると随意選題的なものに関し、かなり意識的になってきており、前三者同様「自作法」は4類15種の最後の1種であるのだが（「綴方教授の方法」334頁）、同書（338頁）には尋一から高三にかけての15種の指導方法を図表にしたものがあり、そこでは「自作法」が尋二後半から徐々に導入され、高一～高三で最も盛んに行われるよう、カリキュラムの中に明確に位置づけられている点が注目される。

これを要するに、教授書等の理論面では、明治末期に随意選題的なものが少しずつ登場し始めており、殊に明治40年前後からは多分に意識的になってきていたと言ってよいであろう。

一方、実践界の状況はどうであったか。これについては高森邦明氏が大正3～4年頃の状況について、まず大正4年10月『富山教育』に発表された富山県師範学校訓導高田孝次による「自由作文」の実践について紹介し、「高田は、随意選題という語を用いないで、内容はそれと同じ方法を実践している」と述べた後、同年1月に保科孝一が『最近国語教育上の諸問題』の中で述べたことを手がかりとして、次のように考察している。

……随意選題ということは、自由発表主義を底流にし、西欧からの自発活動の思想を土台として、その頃かなり広く行なわれ始めていたのではないか、というように思われる<sup>(29)</sup>。

また、氏は富山県高岡市立博労小学校に残されている明治42年3月卒業から大正9年3月卒業までの12年間の卒業記念文集を分析し、その中で、随意選題が初めから行われていることを明らかにしている<sup>(30)</sup>。

高森氏の考察は主に富山県の資料に基づくものであるが、当時のこのような実践が富山県のみの特異な事例であったとは考えにくい。やはり氏の言のごとく、「かなり広く行なわれ始めていた」と考える方が自然であろう。すなわち、随意選題に関する芦田恵之助の影響力がまだほとんどなかった頃から、随意選題と同じ試みは既に各地でなされていたと思われるわけである。おそらくは明治期の型にはまった作文指導への反省と、自然主義等文壇の影響から<sup>(31)</sup>、自由に作文をする傾向が小・中学校の作文教育の一つの潮流として現れてきていたと考えられるのであり、したがって先の五十嵐の主張は、明治末から大正にかけての自由作文（随意選題）を志向する作文教育の潮流の中にその位置を占めることになる。殊に、芦田の随意選題論確立以前であるという意味では、比較的早期のものとして位置づけることができるのである。

### 3 「生活の表現」と五十嵐の思想

しかし五十嵐のこの主張は、単にその潮流における早期のものとしてのみ位置づけるだけでは不十分である。それに加えて、大正後期以降の作文教育思想の先駆的な役割の一翼を担っていたと考えることが可能なのである。なぜなら五十嵐は、明治末から大正初期にかけて『文章世界』誌で積極的な執筆活動を行っていたからである。

『文章世界』は田山花袋が主筆を務め、自然主義文学活動の拠点といわれていた雑誌である。五十嵐自身は自然主義の信奉者ないし推進者ではなかったが、自然主義の影響はかなり受けたと思われる<sup>(62)</sup>。ところでその『文章世界』では、明治45年(1912)5月に、「生活の表現」が主張されているのである。

書くべきことがあつて書いた文章が、書かねばならぬといふ要求が、内心の切なる要求があつて書いた文章が、真実の文章である。

其処には、よしんば表現の術の上に、即ち芸の上にたとへ拙劣な点があつたとしても、活潑々地に活躍してゐる生きた生命がある。此の生命が宿つてゐるさへすれば即ち文章は生きてゐるのである。……

されば文章を書かうとする者は、自己の真実を以て、自己の真実感を以て、直ちに文字を作り出す覚悟でなければならぬ。此の真実を余所にして徒にうまい文章を書かうとして空疎な在り来りの文字を臚列するがごときは誠に以つての外のことである。正に文章道の墮落者である。(「真実の文章」)

自己の文章は自己の生活の表現である。自己の生活の表現は自己を永久に生かさんとする唯一絶対の努力である。即ち文章の不朽の盛事たる所以である。……(「自己を永久にする唯一絶対の努力」<sup>(63)</sup>)

この主張の大部分は五十嵐の作文指導上の考え方とほぼ同じである。五十嵐はその著作の随所で、この「生活の表現」に通ずる発言を行っている。例えば次のような記述である。

「経国の大業不朽の盛事」とは魏の文帝が文章の徳を称へた言である。……これは決して一場の漫言でないのみならず、其の中には永劫不易の真理を含んで居る。……文章を称して人類の事業と理想とを伝ふるもの、一たび人類の心に現はれた真、善、美を長へに後世に伝ふるものといふとも、あながち不当の事ではない<sup>(64)</sup>。(『文章講話』「緒論」)

……深く人を感じしむるには先づ自ら深く感ぜねばならぬ。我れに、主題に対し読者に対する誠実あり、之れを筆に寓し紙に塗るに及び、始めて躍動の妙ありて他の心を震盪し得るのである。赤誠熱情は沈黙をも雄弁たらしめ整はぬ文にも生命あらしむる。至誠に加うるに辞句体制の実を以てするに至つて茲に始めて神品と称せらる<sup>(65)</sup>。(「文章精神論」)

私は第一に真実を写さう、有るがまゝを写さうと思ひます。……人間には、通じて昔を尊び強者に屈従するといふ性質があつて、古人の言つた事だ、先進国の大家の書振だといふと、……つい古人や先輩の真似をなし、やゝもすれば虚偽と思はずして知らず識らず虚偽を云ふといふことになります。……けれども、斯ういふ文は実感の伴はない人真似であつて、従つて読者に充実した感じを与へないのが普通であります<sup>(66)</sup>。(「序に冠して作文上の経験を述ぶ」)

古人の書物を読んでも、文字を忘れて、著者の生活の脈を打つて居る所に触れ、「うむ、此処だ!」と心に沁み込むやうでなければ、本当に読んだといふものではありませんまい。……書く方から云へば、感じや味はひを、成るべく解り易く、其のまゝに書いて、読者が苦勞な

しに、我が真の心持、真の生活に触れ得るやうにしなければなりません<sup>37)</sup>。(「著者の生活の脈を打つて居るところ」)

これらの記述や今までの引用文から『文章世界』と同様の考え方が見て取れることは、逐一指摘するまでもないであろう。ところで、明治38年に『文章講話』、明治42年に『新文章講話』、明治43年に『実習新作文』を出した五十嵐は、ちょうどその同じ時期に『文章世界』で精力的な執筆活動を行っていた。しかも『文章世界』は明治39年(1906)3月創刊で、五十嵐はその創刊号から論文「通俗修辞」を連載し始め、その後大正4年(1915)1月号の「柿」という文章に至るまで、全部で23本の文章を発表し、うち20本は明治39～40年の2年間で集中的に発表されている。つまり五十嵐は、『文章世界』草創期の重鎮ともいえるべき存在だったわけである。そのような五十嵐の考え方が、『文章世界』に集まっていた人々に影響を与え、それが一つの要因となって先の「生活の表現」説が生まれてきたことは十分に考えられる。勿論これが自然主義の大きな流れの中から生まれてきたのは明らかなのだが、さらにそこに五十嵐の考えが反映もしくは吸収されているならば、五十嵐は結果的には自然主義の担い手となっていたことになる。

「生活の表現」について滑川道夫氏は次のように述べている。

綴方教育界に「生活の表現」説が台頭するのは、大正十年の「生命の綴り方教授」(田上新吉)以降である。保守的な教育界は、容易に新説を容れがたくしていた。綴り方教育界は文壇の流れよりほぼ十年おくれて文章・文体に影響を受けているように見える。綴方教育界に「生活の表現」が主流となって展開するのは、昭和初頭であるが、文章作法の世界では、すでに明治末年にとりあげられていたのである。……「文章世界」は花袋や晁による自然主義文学の牙城といわれたほどであるから、自然主義文学が追求する「真」から「生活の表現」が導き出されたものだろう。生命の躍動する自己の真実感が、「真」の表現をささえるとする考え方が存在する。学校作文教授に反映するには、なお十年の歳月を要するにしても、とにかく、作文の世界に「生活の表現」の概念が導入された事実は見逃すことのできない歴史的意義がある<sup>38)</sup>。

滑川氏のこの言に従えば、五十嵐力の作文教育史上の位置づけは次のようになる。節を替えてまとめておきたい。

#### 4 結論として——作文教育史における五十嵐力の位置

① 芦田恵之助の随意選題論確立直前の、自由作文を志向する教育界の潮流の比較的早期のもの。

② 『文章世界』の主要メンバーの一人としての五十嵐の活動が自然主義文学運動と相俟って「生活の表現」説を生み、それが大正後期以降の綴り方における「生活の表現」の呼び水になったという意味で、「生活の表現」による綴り方の先駆的役割を果たした。

つけ加えれば、芦田恵之助は『綴り方教授』の中で、五十嵐の命名になる「追歩式」「頭括式」「尾括式」「両括式」「散列式」——『文章講話』(1905年6月)において提出された用語で、『新

文章講話』(1909年11月)になると「両括式」が「双括式」に改められている—という語を用いている。『綴り方教授』(1913年11月)刊行の時点までにこの五十嵐の用語を踏襲した書物は管見の限り見つかっておらず、従ってこれは五十嵐からの、就中『文章講話』からの直接的影響と見てよいと思われる。勿論これを以て五十嵐が芦田に、ひいては後の作文教育に多大な影響を与えたとまでは言えないが、文章構成に関するこれら五十嵐の用語が現在においても用いられている事実は、軽視されてはならないであろう。

#### 注

- (1) 筆者は既に五十嵐力の作文指導に関する考察の基礎的研究として、彼の修辞理論に関する論考を發表している。(「五十嵐力の修辞理論に関する考察——作文教育のための再編と精選——」『人文科教育研究』16号, 1989) 同論文では「付記」として、五十嵐には中学校における「国語」(「作文」ではない)の実験経験があったことについてもふれておいた。
- (2) 『作文三十三講』(1912, 早稲田大学出版部) 203~206頁
- (3) 『国学院雑誌』昭和8年(1933)11月号
- (4) 注2 同上書 18~28頁 (5) 注2 同上書 388頁 (6) 注2 同上書 17頁
- (7) 注2 同上書 83~84頁 (8) 注2 同上書 87頁 (9) 注2 同上書 385~386頁
- (10) 注2 同上書 206頁
- (11) 『実習新作文』(1910, 早稲田大学出版部) 8頁
- (12) 注11 同上書 11頁
- (13) 1905, 早稲田大学出版部
- (14) 1907, 早稲田大学出版部
- (15) 注1 記載拙稿参照
- (16) 『実習新作文』序文で五十嵐は、「本書は『新文章講話』の姉妹巻で、『新文章講話』に説いた事の実地応用を試みたものである。」と述べている。また『新文章講話』序文では、自分が早稲田大学で、不本意ながら文学ではなく文章(修辞学)の講義を担当してきたことについて触れた上で、「どうせしばらく此の仕事に従ふことならば、此の方面で、何か一つ目立つた記念品を遺してはどうか……と、かう考へて茲に文章に関する二種の著述を出来さうと決心した。其の一は前の『文章講話』, 又此の『新文章講話』で、其の二は遠からず公にせむとする『実習新作文』である。」(傍点原文)と述べている。ここから、理論書としての『文章講話』『新文章講話』と、実際の作文書としての『実習新作文』とを、初めから分けて著すつもりであった五十嵐の意図が読み取れる。
- (17) 1916, 大日本図書
- (18) 1917, 至文堂
- (19) 注4 同上
- (20) 例えば古田拓氏は、「解説と通史 綴り方教授」(芦田恵之助『教式と教壇 綴り方教授』)

1973, 明治図書)の中で、芦田が『第二読み方教授』の「私の国語教授に関する追憶」において、明治38年第2学期あたりから「随意選題にまとまった考を持つやうになりました」と記していることなどに基づいて、「芦田恵之助が随意選題で日本作文史上で百八十度の転回を示して一大道標を打ちたてたのは大正二年、著者、数え年四十歳の時……」述べているし、飛田多喜雄氏も

(芦田は)自作主義を強く主張し、この立場から、前述の、自作を綴り方教授の最後の到達点として論じた佐々木説をあやまりであると批判している。むしろこの作業は、尋常一学年入学当初においても明らかに認めることができると断言している。また、「指導は自作の力を発達させるがために行ふ作業である。」として、谷本富が帝国教育会の講演で、「自作発表もよいが、書けるようにして書かせねばならぬ。」と述べた、その書けるようにすることが、余のいわゆる指導の意だと強く論断している。後に綴り方教授の中心問題として発展する随意選題の文字は数回しか出ていないが、その素地は本書でも十分うかがい知ることができる。(『国語教育方法論史』1965, 明治図書, 91頁)

などと述べている。

- (21) 1898, 東海林書店・富山房。なお、これは明治34年に改訂版が出版されている。
- (22) 1901, 藤崎書店 (23) 1899, 同文館 (24) 1902, 育成会 (25) 1904, 大日本図書
- (26) 1905, 同文館 (27) 1909, 弘道館 (28) 1912, 広文堂書店
- (29) 『近代国語教育史』(1979, 鳩の森書房) 148～150頁
- (30) 第74回全国大学国語教育学会(平成元年8月)口頭発表「随意選題移行期の児童作文の実態——高岡市立博労小学校卒業文集の場合——」
- (31)(32) 注1 記載拙稿参照
- (33) 『文章世界』薫風号(第7巻7号)。この号は明治45年5月の、いわば増刊号であり、「文章と新生活」という特集が組まれていて、そこに35編にわたる無記名の短い文章が寄せられている。引用した「真実の文章」と「自己を永久にする唯一絶対の努力」はその内の2編であり、この2編は連続しているものである。
- (34) 『文章講話』1～2頁
- (35) 注34同上書 320～321頁
- (36) 『縮刷新文章講話』「序に冠して作文上の経験を述ぶ」1～2頁
- (37) 注2 同上書 49～51頁
- (38) 『日本作文綴り方教育史1 明治編』(1978, 国土社) 379頁

※ 引用文中の傍点・圏点は原則として省略し、旧字体・踊り字は現代表記に改めた。